

[セッション II]

「沖縄平和修学旅行と記憶の問題」

高橋雄一郎（獨協大学教授）

毎年 40 万人前後の中高生が訪れる沖縄は、人気の修学旅行先の一つである。修学旅行先としての沖縄の魅力は、美しい自然と独特な文化に加え、国内で唯一地上戦が戦われた戦跡を巡ることで、平和について考えること、いわゆる「平和学習」の効果が期待されるからであろう。映画『GAMA-月桃の花』の公開などもあって、近年では、「ガマ体験」を修学旅行のハイライトとする学校が多い。生徒たちは「平和ガイド」の案内で壕に入り、説明を受けた後に、懐中電灯を消すように指示される。漆黒の闇が恐怖の体験として刻印され、平和への想いを新たにす、という仕組みが構築されている。しかしガマは、沖縄の人びとにとっては、爆撃からの避難場所であり、恐怖は、むしろ壕の外にあった。ガマへの入場が、視覚中心の従来の観光から、身体性を重視したものへの転換だと主張することは出来ても、シミュレートされた体験であることは変わらない。シミュレーションを現実として教えることは、平和学習のテーマパーク化に繋がる。